

JISS所報

2014年3月1日発行・・・所報No.363

目次

スウェーデン研究連続講座第154回、第155回、第156回

第154回

翻訳家 宮田宣子

「スウェーデンとカール・ラーションに魅せられて」**第155回**特定非営利活動法人「元気の素カンパニー以
和貴」理事長 植木秀子 第156回「スウェーデン国会議員団のみた被災地福島の影響」**第156回**元駐スウェーデン・ラトビア特命全権大使、元仏
教大学特任教授 藤井 威「スウェーデン市民はなぜ高負担を受け入れたのか」

新シリーズ

スウェーデンのニッポン人(5)

「新しい時間」荒瀬 響

スウェーデン社会研究所 所報
No.363 2014年3月1日発行

発行所: 社団法人スウェーデン社会研究所

〒105-0013 東京都港区浜松町1-8-1

(株)科学新聞社内5階

連絡事務所

〒124-0024 東京都葛飾区新小岩2-19-7

Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596

e-mail: jiss12@nifty.comURL: <http://www.sweden-jiss.com/index.html>

発行人・編集責任者: 野崎俊一

Publisher&Editor in Chief: Shunichi Nozaki

編集者: 久保田健司

Editor: Takeshi [Kubota](#)

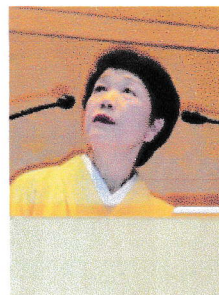
JISS所報

2014年3月1日発行・・・所報No.363

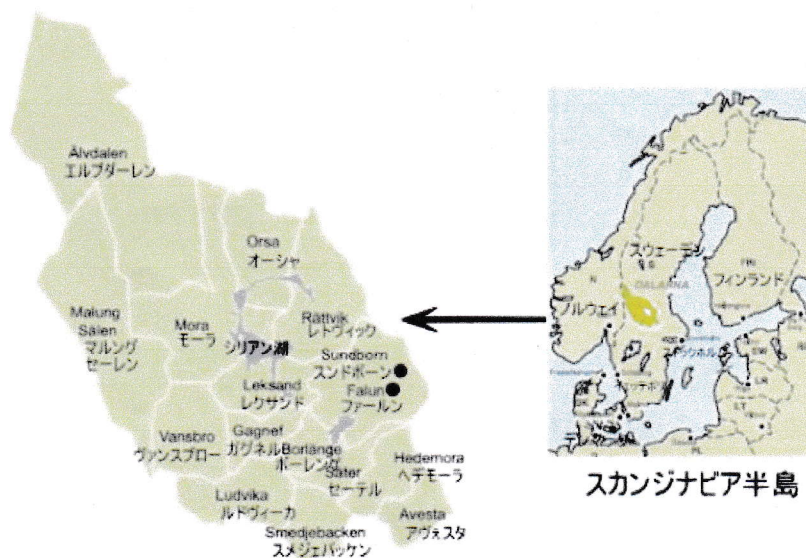
154回スウェーデン社会研究講座
 「スウェーデンとカール・ラーションに魅せられて」

翻訳家 宮田宜子

19世紀の画家カール・ラーションはスウェーデンではカレンダーの売上ナンバーワンの画家で、いまだに国民から大変親しまれています。10年くらい前から、彼に強い興味を持つようになり、色々調べうちに日本とも浅からぬ縁があることもわかりました。その後、直系の親族とも交際が始まり、毎年カール・ラーション・ガーデンのある村でご家族の方々と夏まつりを過ごすようになりました。来日したこともないのに「日本が大好きだったカール・ラーション」の数々の作品と彼の話を紹介します。(案内文から)

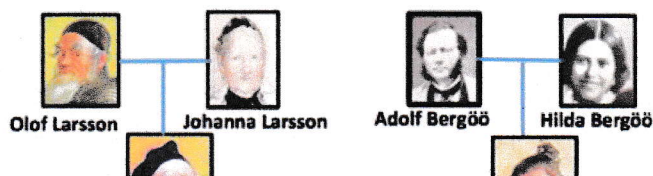


スウェーデンとのご縁のそもそものきっかけは1983年に高校2年生だった二男がAFSの留学生としてストックホルム郊外のAspegren(アスベグレン)家に滞在したことに始まります。1998年、再訪する大学4年生の二男に同行して以来、大のスウェーデン・ファンになってしまい、「50(歳)の手習い」でスウェーデン語の学習を始めるとともに、2008年以後はほぼ毎年行くようになり、今年6月にも行ってきました。2008年には、スウェーデン人の心のふるさとと言われるダーラナ地方に息子のホスト・ペアレツととともに旅行し、カール・ラーションのアトリエ兼住まいであった「Lilla Hyttnas(リラ・ヒュットネース)」にも行きました。



ダーラナ地方(右の地図の緑のところ)

質素でありながら、おしゃれなデザインの家具や手織り、手刺繍のクッションやソファ、陶器類、そして茶目つきたっぷりな様々な仕掛けのあるこの家が大好きになりました。また、日本への並々ならぬ興味の程がうかがえるような、浮世絵、日本画、陶器、仏像、日本人形などのコレクションにも大きく心を揺さぶられ、圧倒されました。そのミュージアム・ショップに置いてあった「Resan till Carl Larsson-Gården(カール・ラーション・ガーデンを訪ねて)」という絵本の登場人物のおじいちゃんとうき夫の姿が重なり、なんとか翻訳したいと思うようになり、そのために何度も現地に出向くうちに、幸運なきっかけでカール・ラーションの孫のカーリンさんとの交流も始まりました。





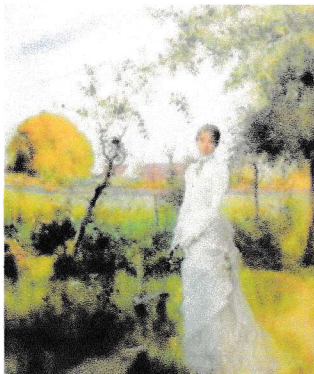
カール・ラーションは、1853年5月28日にストックホルムのガムルスタンのPrästgatan（プレースト・ガタン）78番地で生まれました。ガムルスタンは今では観光地になっていますが当時は貧民窟でした。父親は日雇い労働者で飲んだくれで、ちょっとお金が入ると直ぐに家族をほったらかしてどこかに行ってしまう、とんでもない人でした。母親のヨハンナが洗濯婦をしたりして生計を立てるという極貧家庭で悲惨な幼少期を過ごしました。そんなカールに一大転機が訪れたのは、通っていた貧民学校の教師から絵の才能が認められ、13歳で王立美術学予備課程に入学し、絵の勉強が本格的に出来るようになってからでした。75年頃にはルボルタージュ記事の挿絵を描く仕事などでかなりの収入を得られるようになり、家族を養う傍らエッチング技法も習得しました。



カール・ラーション生誕の家前でストックホルム滞在中のMadeleine 今井先生とカール・ラーション展を見た後で(2013年6月25日)

ドイツの賑広場

1877年から81年まで芸術の都パリに留学し、この間フランス芸術アカデミー（いわゆるサロン）に何度か出展しますが、落選するばかりで日の目をみず、セーヌ河に身を投げようとしたこともあったそうです。その後、心身の病から回復後の1882年には、スウェーデンから留学していた画家仲間に誘われ、パリ南東のフォンテンブローに近いGre-sur-Loing（グレー村）という芸術家コロニーに転居します。ここには北欧の画家や音楽家、作家をはじめ、アメリカ、カナダ、そして日本からの留学生も滞在中にいました。中世の面影を残すこの静かな村に滞在するうちカールの心は癒され、外光技法の水彩画に新境地を見出し、画家として認められ、フランスのジャポニサン（日本美術愛好家）の影響を受け、日本の美術に親しんだとされます。最愛の妻となるKarin Bergöö（カーリン・ベリヨー）と再会したのも、この村に滞在中のことです。カーリンもスウェーデンから絵の勉強に来た四人の女子留学生の一人でした。二人は恋に落ち、ほどなく婚約することになりました。翌年の1883年にはグレー村の風景を描いた水彩画がサロンに入選し、その直後からスウェーデンのイエーテボリの豪商Pontus Fustenberg（ポントウス・フステンベリ）がパトロンになります。



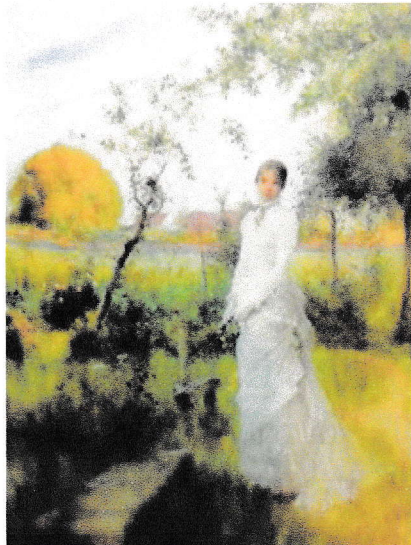
Potatis näs och kos öron
じゃがいも鼻、仔牛の囁

二人はいったん、スウェーデンに帰り結婚式をあげましたが、この結婚でカールは惨めだった、自分の子ども時代の埋め合わせをするかのように幸せな家庭を築いていきます。1884年にグレーに戻り、この年の8月長女、Suzanne（スザンヌ）が誕生し、85年には、のちに定住することになるSundborn村に夏の間滞在します。87年にはイエーテボリに住み、ここで長男のUlf（ウルフ）が誕生します。88年になると、フステンベリの依頼によるTriptyk（三幅対の大作・イエーテボリ美術館蔵）制作のため、長女と長男を妻



ドイツの廣広場

1877年から81年まで芸術の都パリに留学し、この間フランス芸術アカデミー(いわゆるサロン)に何度か出展しますが、落選するばかりで日の目をみず、セーヌ河に身を投げようとしたこともあったそうです。その後、心身の病から回復後の1882年には、スウェーデンから留学していた画家仲間にも誘われ、パリ南東のフォンテンブローに近いGre-sur-Loing(グレー村)という芸術家コロニーに転居します。ここには北欧の画家や音楽家、作家をはじめ、アメリカ、カナダ、そして日本からの留学生も滞在していました。中世の面影を残すこの静かな村に滞在するうちカールの心は癒されとともに、外光技法の水彩画に新境地を見出し、画家として認められ、フランスのジャボニサン(日本美術愛好家)の影響を受け、日本の美術に親しんだとされます。最愛の妻となるKarin Bergöö(カーリン・ベリヨー)と再会したのも、この村に滞在中のことです。カーリンもスウェーデンから絵の勉強にきた四人の女子留学生の一人でした。二人は恋に落ち、ほどなく婚約することになりました。翌年の1883年にはグレー村の風景を描いた水彩画がサロンに入選し、その直後からスウェーデンのイエーテボリの豪商Pontus Föstenberg(ポントウス・フステンベリ)がパトロンになります。



Bruden (Karin) 花嫁(カーリン)
1883年



Potatis näs och kos öron
じゃがいも鼻、仔牛の腫

二人はいったん、スウェーデンに帰り結婚式をあげましたが、この結婚でカールは惨めだった、自分の子ども時代の埋め合わせをするかのように幸せな家庭を築いていきます。1884年にグレーに戻り、この年の8月長女、[Suzanne](#)(スザンヌ)が誕生し、85年には、のちに定住することになるSundborn村に夏の間滞在します。87年にはイエーテボリに住み、ここで長男のUlf(ウルフ)が誕生します。88年になると、フステンベリの依頼によるTriptyk(三幅対の大作・イエーテボリ美術館蔵)制作のため、長女と長男を妻の実家に預けて夫妻でパリに行きます。その秋にはパリで二男Ponnus(ポントウス)が誕生しています。89年にはスンドボーン村出身であった妻の実父から小さな古い家リラ・ヒュットネースと

土地を譲り受けます。

スンドボーン村は時間が止まったような静かな美しい村です。ストックホルム生まれのシティ・ボーイだったカールが、この田舎を一目で気に入ったのは、妻となるカーリンと再会して恋に落ちたグレー村の景色と似ていたことが第一の理由だと思っていますが、この古家を自分たちで好きなように改造できるという考えもあったからではないかと思えます。

カール・ラーション夫妻には三男四女の子どもがいました。お手伝いさんを含めて十人という大所帯でした。スンドボーンのリラ・ヒュットネースで定住するようになりますと、これをテーマにした作品を多数制作していくようになります。90年にはスンドボーンの家と家族を描いた水彩画集「Ett Hem (わが家)」

制作を開始し、この間、91年に二女Lisbet(リスベト)、93年には三女[Brita](#)(ブリッタ)、94年に三男のMats(マツ 生後2か月で95年に死去)、96年には四女Kersti(シェスティ)が誕生しています。私が親しくしていただいているカーリン・オルソンさんのお母様がシェスティです



スンドボーン村は時間が止まったような静かな美しい村です。ストックホルム生まれのシティ・ボーイだったカールが、この田舎を一目で気に入ったのは、妻となるカーリンと再会して恋に落ちたグレー村の景色と似ていたことが第一の理由だと思っていますが、この古家を自分たちで好きなように改造できるという考えもあったからではないかと思えます。

カール・ラーション夫妻には三男四女の子どもがいました。お手伝いさんを含めて十人という大所帯でした。スンドボーンのリラ・ヒュットネースで定住するようになりますと、これをテーマにした作品を多数制作していくようになります。90年にはスンドボーンの家と家族を描いた水彩画集「Ett Hem (わが家)」

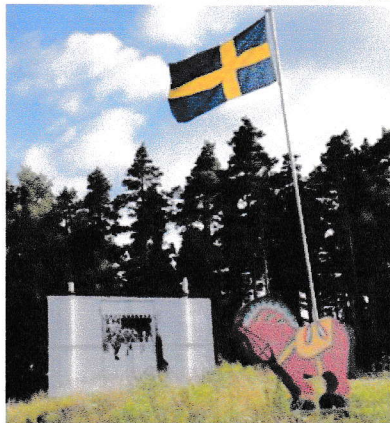
制作を開始し、この間、91年に二女Lisbet(リズベト)、93年には三女Brita(ブリッタ)、94年に三男のMats(マツ) 生後2か月で95年に死去)、96年には四女Kersti(シェスティ)が誕生しています。私が親しくしていただいているカーリン・オルソンさんのお母様がシェスティです

王立美術学校教授職の勧誘をも断り、カールは片田舎スンドボーン村にとどまりますが、このことは「文化

の発信地はなにも大都会である必要はないのだ！」という強烈なメッセージでもあると思います。99年には、新しいアトリエの増築が完成し、「Ett Hem

も出版されます。豊かになったカールは、97年にスバダルフェットという農場付きの土地や、両親のためにもスンドボーン村のカルトバッケンに土地付きの家を購入しています。1900年に四男Esbjörn(エスビョーン)が生まれましたが、1902年にカール・ラーションの母が亡くなったのに続いて05年には長男ウルフが18歳で病死しています。

06年にはスウェーデン中興の祖、グスタフ・ヴァーサの「ストックホルム入城」の壁画を国立美術館に納入し、08年には画集「Das Haus in der Sonne(日向の我が家)」をミュンヘンで出版、11年になると、ローマ、ベルリン、ドレスデン、ヘルシンキなどの都市を訪れ、さらにこの年には国立美術館の「Midvintersblot(冬至の生贄)」の制作を開始していますが、後の14年になってこの絵画の納入を巡って国立美術館ともめることになります。(編集部注1)。



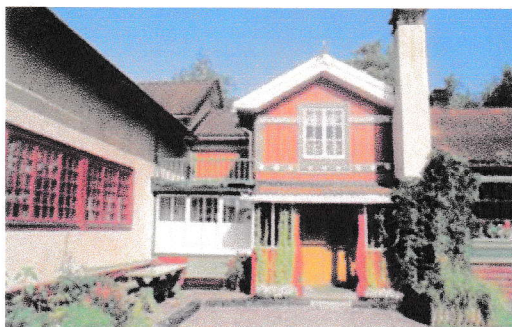
Kihlströmさんのご主人のLeif作の Sundbornshäst (脚の裏には2013.6. L.K.と書いてあります)。



Sundborn村に入ったところの最後のスクリーン この馬は Sundbornshäst

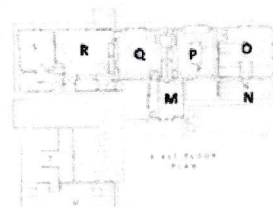
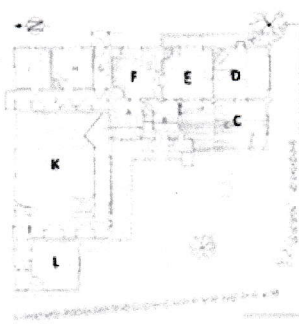
自伝が完成した1919年の1月22日にファールンの自宅で65歳で死去しました。もともとこの自伝「Jag (私)」は、極貧の幼少期とカーリンと結婚する前の女性関係などが赤裸々に記述されている子どもに及ぼす影響をカーリンが憂慮したため、出版は死後12年経った31年になりました。

お配りした見取り図でご覧いただく通り、リラ・ヒュットネースは100年以上前の姿がそのまま残っています。スンドボーン村はストックホルムから電車で3時間弱のファールン駅から車で20分ほどのところにありガイド付きで見学もできます。子孫が経営し、年間の観光客は6万人というスウェーデンでももっとも人気のある観光スポットになって

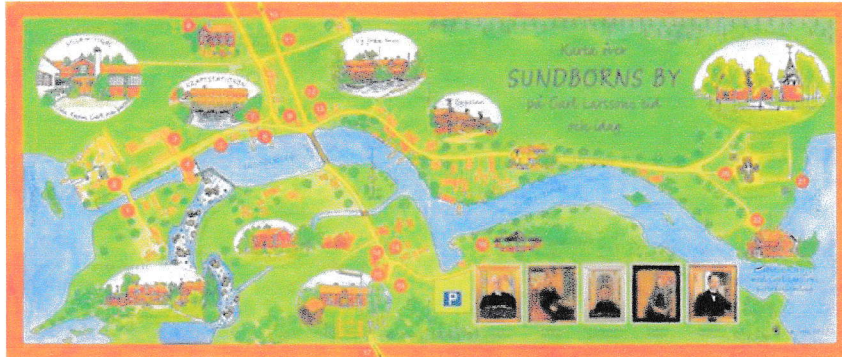


現在の Lilla Hyttlös

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| A. 食器貯蔵庫 | J. 勝手口廊下 |
| B. 階段室 | K. 新しいアトリエ |
| C. 仕事部屋 (最初のアトリエ) | L. ベリマンス・ステューガン (鉱山主の館) |
| D. 店間 | M. カーリンの書斎 |
| E. 食事室 | N. O. ママと小さい女の子の寝室 |
| F. 台所 | P. パパの寝室 |
| G. 廊下 | Q. 読書室 |
| H. 使用人室 | R. ガムラ・ルンメット (客用寝室) |
| I. 浴室 | |



2013年はカール・ラーションの生誕160周年に当たり、6月13日から11月3日までストックホルムで大きな展覧会が開催されておりました。6月に2回見てまいりましたが、それとコラボレーションするかたちで開催されていた「水車小屋ギャラリー（スンドボーン村の製粉場だった建物を活用したもの）」での「De Mina（ドム・ミーナ 私の家族）展」でもカーリンの本物のウェディング・ドレスや、二人の結婚指輪や、七人の子どものたちのその後の人生についての詳しい説明がありました。



- | | |
|--|------------------------|
| 1. ストーラ・ヒットネース | 13. ムルマン家具・装飾品店 |
| 2. カール・ラーション・ゴードン（リラヒュットネース） | 14. ボンデス・ゴード（農民広場） |
| 3. レストラン「ヒット・ストウガン」 | 15. OKO8（ガソリンスタンド） |
| 4. スンドボーン水力発電所（C.L.設計） | 16. カフェ |
| 5. 鍛冶屋「オー」 | 17. ペンション「カールボーン」 |
| 6. カールスビーヘッデン製陶所 | 18. 案内板 |
| 7. ワークショップ（インフォメーション・センター） | 19. ダンス広場 |
| 8. 水車小屋（ギャラリー） | 20. スンドボーン教会 |
| 9. ソール・ゴードン（絵画・装飾品店） | 21. 水泳場 |
| 10. フォンスネース・ゴルフ場 | 22. カール・ラーションの肖像画作品展示館 |
| 11. スーパーマーケット「デンボ」 | |
| 12. ビツァアラ（さすがスウェーデンで最初にビツァやバスタを食べていたラーション家の村！看板はカール・ラーション） | |

2011年から毎年夏至祭の頃スンドボーンに滞在するようになり、カールの孫のカーリンさんの別荘に泊めていただいたり、スンドボーン村の夏至祭や身内だけの野外パーティにも参加させていただき心温まるおもてなしを受けています。

編集部注1：所蔵はスウェーデン国立美術館。寸法640cm×1360cm。スウェーデンでもっとも論議を呼んだ絵画。絵画は国王ドーマルディが飢饉回避のための犠牲とされた、北欧神話の中の伝説を描いている。長い論争の末に国立美術館から受け入れを拒否された。しかし、議論は20世紀後期に再浮上し、この絵画は当時日本人の手に渡っていたものを同美術館が購入。そしてラーションが生前、「この絵は欠点を抱えつつも、いつか来るその日、私が去った時、すばらしい展示場所を得て、栄誉を与えられるであろう」と言わしめたように、ラーションがそれがあるべきと意図していた場所に展示されている。（ウィキペディア・フリー百科事典からの要約を抜粋、転用）



Kerstiの家の前でバイオリンを弾く孫カーリンとriksspelmanのPelle Gustafson
後ろの男性は左側がカーリンのご主人のDavid Olsson
右側が兄のRolf



カール・ラーションが描いた「スンドボーン教会内部」

〈おことわり〉講演の再録については宮田さんが主宰する「カーリン＆カール・ラーション友の会」のホームページ掲載の記述も参考にし、一部を転用させていただきました。

なお、宮田さんが講演で披露された夏至の前日祭りの夜の音楽会（スンドボーン村教会）動画は（www1.icnnet.jp/~carl-larsson/）でアップされています。

JISS所報

2014年3月1日発行・・・所報No.363

第155回スウェーデン研究講座 「スウェーデン国会議員団のみた被災地福島印象」

特定非営利活動法人「元気の素カンパニー以和貴」理事長 植木秀子

9月にスウェーデンから国会議員5名が3・11の被災地である福島県いわき市を訪問しました。その案内役を福島の復興に対して献身的に努力している植木さんが務めました。いわき市は被災地でありながら、他の地域からもっとも多くの避難民を受け入れている街です。そこには除染、仮設住宅、補償金、放射能など未だ解決に目途の見えない色々な問題が凝縮しています。そのような状況を世界有数の原発大国スウェーデンから視察に訪れた国会議員の人はどのように感じたでしょうか。今の「フクシマ」を外国がどのように見ているのか。「フクシマ」を風化させないためにも皆さまのご参加をお待ちしています。(案内文から)

編集部からのおことわり。目次と案内文のみで割愛。

Copyright (C) Bulletin of The [Japan](http://www.sweden-jiss.com) Institute of Scandinavian Studies All Rights Reserved

第156回スウェーデン研究講座

「スウェーデン市民はなぜ高負担を受け入れたのか」

元駐スウェーデン・ラトビア特命全権大使、元仏教大学特任教授 藤井 威

大使勤務から帰って来た時は60歳。今の私は73歳ですが、その後の私はスウェーデンという国に惚れっぱなし。大学では表題のテーマで講義しておりました。大体30コマ、ひとコマは約1時間半ですからざっと45時間。これをこの場でするのはちよつと無理がありますが・・・私は元々、外務省育ちの外交官ではありません。大蔵省出身で、それも主計局。つまり国内の政治的な仕事ばかりをしていました。その折に、当時の総理大臣からスウェーデン大使赴任の人事を言われ、私は「喜んでいきます」と言いました。私は1997年から2000年まで大使でしたが、外務省出身以外の大使赴任は私が初代です。この滞在中に私はスウェーデンという国に惚れ込んだのです。その話をこれから致します。



スウェーデンは無茶苦茶な増税をやることによって高福祉高負担の国家を創ったけれど、どうしてそれをスウェーデン人は受け入れたのか。増税なんていうものは皆嫌がるものですね。増税と言った途端に拒否反応するのはどの国でも同じです。それをどうして増税路線を引き受けたのか。そのモノの考え方の根本に遡ってお話をしたいと思います。

私達のモノ考え方の最大の特徴は「人は一人では絶対に生きられない。どこかの何らかの形で集団に属していなければ人は生きることではできません。完全に単独で生きることのできる動物または植物はありません。動植物はどこかの環境の中でしか生きられないはずだ」。人間の場合を考えてみますと、まず家族の一員です。次に近所の人々が創るコミュニティがある。向う三軒両隣です、ね。あるいは集落の一員です。

スウェーデンの場合は、その基本は2千以上ある教会の教区。つまり、スウェーデンの場合は今950万人で、日本の人口の14分の1の規模。その規模の国に2千の教区は大変な数です。その1教区には約200から300人という規模が多くあります。日本流で言いますと、「教区」というのは、「大字」(おおあざ)とか「字」(あざ)に該当すると思って良いわけです。

ついでに申しますと、私は1940年生まれ。この年は日本が戦前もつとも経済が発展した年です。そこから後はガタガタになりました。戦争のためです。1941年に、日本は今から考えたら信じられないアホな国でした。真珠湾奇襲攻撃をかけ、太平洋戦争が始まっています。世界第二次戦争でドイツ・ヒトラーが戦争を始めたのは1939年。私が生まれる前年でした。1945年の八月に広島に原爆が落ちました。長崎と合わせて2発の原爆でついに日本は手をあげて敗戦となった訳ですが、その時、私は5歳でした。その時、驚くべきことに私は広島に住んでいました。従って、私は間違いなく原爆被爆者の1人でした。そして財産、家屋など全てを失いました。当時は大きな家に住んでいましたが、残ったのはたった一つ。両親と私、それと私の弟の健康だけが奇跡的に残ったのです。そして私は兵庫県にハギワラという人口2,300人という集落にある尼寺に預けられました。小学1年生から4年生まで、いわゆるチンネンさんをやりました。そのチンネンさん生活をどうやっていたか、そのことが分かるからスウェーデンではそれが今でもその気持ちが活きている。

どここの世界でもそういう状態であることには間違いがないわけです。近隣コミュニティ、または200

300人をさらにまとめたモノがコミュニティ。それをスウェーデンではコミュニティといい、日本では市町村。そしていくつかのコミュニティがまとまって、県、スウェーデンではランスティングと言います。年代から言うと、日本の明治維新のちよつと後。つまり、日本の方が先にこういう状態を創り出した。スウェーデンの場合はずっと国王体制でした。代官を長というレーンがあり、このレーンの長官が日本でいう県の代行者だった。それをみんなで、いわば選挙で知事を選ぼうという話になったのは1870年代です。明治維新よりも後のことです。

この県の一員であると同時に、さらにその上の国の一員であり、それからその上のEUの一員であり、さらに地球規模組織の一員です。この説明に時間をかけてこんな馬鹿げたことを言っているが、皆さんは「当り前のことではないか」と思われになるのですが、その、当り前じゃないことを全く無視したことしか創れなかったのは、実は先進国では日本だけです。

スウェーデンの場合を見てみると、まず家族、そして近隣コミュニティをとてとても大事にします。そのような考え方はいくつかの例ではっきりと示すことが出来る。地方自治、地方分権重視、つまりコミュニティ重視に繋がる。

具体的に示してみます。第一に、自分たちの住む環境をとてとても大事にします。これは、自分たちの住む家を大事にすると同じほど環境を大事にするということ。第二に、自分たちの住む集落とその周辺の美しさをとてとても大事にする。と言うことは、先祖代々培われてきた住環境を大事にし、その一環として自然を大事にする。ストックホルムの中心街ガムラスタンの真似をして、「小ストックホルム」を造ろうなどという気持ちはこの国の人々には全くありません。先祖代々培ってきたその都市独自の美しさを大事にし、守ろうとするのです。第三に、過去の歴史的遺産を大事にする。これこそ、各集落、各コミュニティ独自の大事な生活環境であり、そこに住む人のかけがえのない誇りなのです。第四に、自然。特に「森に帰る」ことを大事にする。この国には「自然享受権」と呼ばれる権利が認められ、のちに成文化されて自然保護法に規定された。第五に、人々は自分たちの属する集団、例えば集落やコミュニティの伝統や行事を大事にする。

以上のような自分たちの属する集団を大事にする気持ちはスウェーデン社会の色々な面でとても大事な役目をしている。それは第一に、集落内にもともに生活する人々について、手を取り合って、また助けあって良い環境を創っているという気持ちが強い。第二に、現在、自分たちが保存してきた自然や生活環境を損なわないで次の世代の人たちに

引き継いでいくことを人々は当然の義務と考える。良い伝統や良い環境を守るためには、建物の建て替えや新築に強い規制がかかるのも当然と考える。第三に、このことはとても大事なことだが、弱者に対する福祉事業、ここで言う弱者とは非常に広い意味で、障害者、病人らのほか、老人、子供、幼児さらには女性なども含まれますが、この弱者について、コミュニケーション、ランスティング、あるいは国しかできないという意識があり、そのためにはみんなで負担を負うことを受け入れる態度を生んだ。第四に、スウェーデンのような「皆が皆を支える社会」という、国にとっても、結局、有利な結果を生むということを良く知っているのです。地球温暖化の問題や省資源、省エネルギー政策の世界的な推進が結局、自分たちの利益になることを良く知っているのです。

日本の場合はどうか。スウェーデンのような、いわゆる縦の集団を重視する考え方は無くなっちゃった。私が子どもの頃、戦争が終わった時期にはそれが日本にはあった。それが、何時から無くなったかというのは非常に大きな問題ですが、それを言い出したら時間がかかるためこの場では割愛します。

さて、スウェーデンが19世紀の終わりの時期はどうだったか。この時代はまだ貧しかった。その時代背景を説明しますと、産業革命が進み、ドイツ、フランス、アメリカで経済発展がどんどん始まります。スウェーデンもこの産業革命の波に巻き込まれたが、先の国にイギリスを加えた諸国に比べて一歩遅れて発展しましたので、この19世紀はスウェーデンにとっては貧乏国であって、移民の輸出国でもあった。スウェーデンでは食えない、生活することが出来ない代表例は農村の二男、三男、それから商店の同じく二男、三男、あるいは土地を持っていない小作人。こういう人たちは都市に出て行って仕事を見つけざるを得ない。しかし、ものすごい低賃金で働かされ、それでも働くチャンスがあればよいのですが、それが与えられない場合は当時の新興国、アメリカに行って移民となる。そういう時代だった。

そして国内に目を向けた保育システムはどうだったか。これについては2013年3月のこの研究講座で水野恵子元日本女子体育大学教授の保育システムについての講演がありましたが(編集部注・所報360号)、これを補足、関連する形で話をします。

この時代には、子どもの養育は保育にかける子どもを何とかしようという慈善的なものしかなかった。施設には、子どもの飼葉桶という名前があった。ひどい名前ですよ。子どもを飼葉桶の中に入れておけば育てられるのか。対象は貧困層の子ども。主としてみなし児、捨て児。この様に名前を見ただけでどういうものか分かって頂けるはずです。これは慈善事業で、宗教的な慈善事業で、レ・ミゼラブルの世界(編集部注:フランス人・ヴィクトル・ユーゴーが1862年に執筆した大河小説。レ・ミゼラブルとは悲惨な人々とか哀れな人々を意味する)。

これに対し、富裕層を対象にした幼稚園といわれる施設もあった。この施設は値段が高く、特権者層の幼稚園でした。そして、この幼稚園に入園出来るのは設備費から運営にかかるものは全て負担出来る金持ちだけで、一般市民には手が出ない施設でした。このように、前者は完全に慈善事業で一銭も税金は使われず、後者も富裕層が対象であることからこちら税金は全然入りません。と言うことは福祉ではない。そしてこの保育システムの発展をみますと、1930年代から1950年代になると、1932年にアルマ・ミュルダールが「大きな子ども部屋構想」を主唱しました。この考えは、子ども保育というものは小学校から問題とするのではなく、もっと幼児の時からケアするのが当然である。これと取り組まないと人口問題が派生出る。人口が減れば、つまり赤ちゃんが生まれなくなればどうするつもりなのか。この当時の出生率は1.7%に下がっていた。この数字に下がるということは経済危機であるという風にとらえ、何が何でも子どもが生まれる状況を創りださなければならない。しかし、当時のスウェーデンは何らかの手を打つほどの金持ちではなかった。

つまり公共部門のための財源がない。したがって人口問題委員会を創設したものの、アルマ・ミュルダール提言のうち、ほとんど実現が不可能と考えられた中で、やったことと言えば、飼葉桶の名前が今でいう保育園に、また富裕層向けの幼稚園も一部名前を変え、そして1944年にはこの二つの保育園と幼稚園に国庫補助金が創設されたことでした。

しかし、このことがなぜ大事かというと、保育を福祉活動という提言に基づき、国が関与する、公共部門が関与することの重要性が認められることになるからです。一方、日本はこの間、何をやってたかということ、戦争だった。このように介護政策を見ても同様に、日本は出発時点で失敗していたかということが言えます。

この介護政策の出発点を改めて整理してみます。スウェーデンの老人福祉、これは福祉ではありません。やっぱり単なる慈善事業であった訳ですが、福祉ではない。スウェーデンの介護事業は全土にネットワークを広げた教会組織や集落の庄屋さんを中心とする寄り合い組織による慈善事業である救貧院を出発点としています。1945年、あの悲惨な第二次世界大戦が終了した時点では、この中絶的な救貧院のシステムの名残りがあまりに改善されないままに残っていました。今でいう要介護老人とか、身寄りのない老人とか、そういう老人が残っていたために救貧院がいわゆる養老院として残ってしまふ。

この養老院はすごく惨めなものでした。日本流に言うと、六畳間に10数人いて、外に出ていくにしても出て行きようがない。従って何もない。寝てるしかない。そういう人たちは必ず運動能力を失います。それが養老院の始まりです。スウェーデンもそういう状態でした。この状態は当時の日本と全く区別なく同じでした。

そこで1946年に総理大臣に就任した社会民主労働党党首のエランゲル首相は、戦後の緊急課題のとして一つとして、救貧院的な雑居型老人ホームの居住環境の改善に取り組みます。その努力の中心は、コミュニケーションによる老人ホームの増築と雑居型ではあっても人間的な居住環境確保の推進、およびランスティングの経営する病院の長期療養病棟の整備でした。

一言で言えば、施設介護型の施策の推進といつてよいでしょう。1960年から70年代にかけて、エランゲル首相とその後継者たち、とくに社会民主労働党内閣は、公共部門の財政力の増強、つまり漸新的増税路線を国民に求めつつ、老人福祉施策を含む各般の福祉サービスの充実路線を展開し、老人ホームについても雑居型施設の建設中止と介護付きの個室型老人ホームの大量供給が実施に移され、よく訓練され、専門技能を有する介護士の確保が並行して企画されます。さらに、各個室に自炊設備を有し、入居者が思い出のこもる家具などの一部を持ちこめる「サービスハウス」と呼ばれる施設の供給も進み、施設介護から一歩、居住介護の方向に進み始めます。

この高福祉国家実現へのステップはどういうものかももう少し詳しく見てみます。ステージを四つに分けます。

第一ステージは1932年から46年ごろまでの戦間期。第一次と第二次世界大戦の間のことです。大恐慌後の暗い時代にも中立を貫き、福祉国家への枠組みを創った。ハンソン首相の時です。また、ミュルダールが世界で初めて子育てを福祉として提言した時機です。この1932年という年は経済的には大不況の時で、日本の昭和史の中でも暗い時機でした。この暗い時機に信じられないことが起きましたね。ドイツ・ヒトラーが政権に近づいた。今から考えたらドイツ人はなぜ、ヒトラーに選挙で勝ったのか。誰も答えが無い。

しかし、スウェーデンは全く逆のことをした。ハンソン首相はこの暗い時代に、先に示したように中立を守り、福祉国家の枠組みを創るようにした。そうした状態の時に戦争が終わった。その中立を貫いた結果、製造設備が残り、戦後復興需要で製造業が発展し、高度成長を遂げましたが、終戦の一年後の1946年、スウェーデンにとっては信じられないことが起こった。ハンソン首相が脳卒中で急死したのです。後を継いだのがハンソン首相から帝王学を学んでいた

エランゲル首相。この46年から60年代までの15年間を戦後成長促進期としてとらえる第二ステージとします。日本では池田内閣・佐藤内閣の時代によく似ている政策をとった。つまり、出来るだけ増税しないで、民間企業の活力を維持して、それで成長を促進して金持ちにすることです。その政策は成功します。

そして第三ステージに入ります。1960年から76年ごろまでの高福祉国家建設の時機で、エランゲル首相と70 年からはバルメ首相になった時です。高福祉ビジョンとして「豊かさを実感できる社会を創ること」が掲げられた。

具体的にはどういうものかと言いますと、①所得の不公平配分の是正②不時の出来ごと、例えば病気とか失業した時に対するセーフティネット③男女機会均等の確立。それは育児負担の軽減だったり、育児の社会化に取り組むことなど。これはミューゲルの提言そのもので、それを実現すること。④としては優れた生活環境の維持。四日市公害みたいなモノは絶対だめだという考え。いくら企業が儲けても、それを社会還元しないようなスタイルは社会にとっては決して豊かな社会とは言えないという思考です。その三ステージの途中、エランゲル首相も亡くなり、あとを継いだのがバルメ首相です。彼は在任中に暗殺されたのですが、在任中は前任者の意向を継ぎ、高福祉国家実現のステップを踏んでいきます。いわば高福祉成熟期で、この状態は現在まで続く第四ステージと言えます。

もっとも、この間には社民党から中道右派への政権交代があった。これに対し国民は高負担には反対ではないが、負担率が限界まで上がり、単なる増税路線では不可能な時代に入った。また、これと並行して高福祉を遂行する上で増税、民主化、地方分権三位一体政策を推進し、2006年の社民党内閣からラインフェルト中道右派政権に交代して以来、福祉サービスの維持をはかりつつ、施策の効率化、負担率の若干の低下を実現しています。

このように福祉国家形成戦略は、経済、社会に驚くほどの効果をもたらしています。それは何か。一つは、福祉国家は雇用増をもたらし、成長を促進した。これは福祉国家パラドックス。まず、福祉国家は雇用増をもたらし、成長を促進した。それは家族政策の成功があります。この背後には保育所の十分な整備、有能なプロ保育士や介護士養成の確保、受益者の負担部分の低廉化があります。この家族政策の成功の重点は、子育ての直接コストの公費負担よりも女性の就業と子育ての両立のための環境整備に置いた。それが女性の家庭からの解放を促し、それがまた女性の就業率の上昇となった。さらに福祉サービス分野における女性の大量進出となり、結果として世帯の所得増加、雇用の場の増加は成長促進となった。また、合計特殊出生率の上昇をもたらした。このことが長期的に人口減少の阻止、少子高齢化進行の緩和などとなり、強いては社会、経済、福祉分野の持続性確保に結びつき、福祉国家は所得分配の公平をもたらした、経済力の地域間格差の拡大も防いだと言えるのです。

では、こうした高福祉・高負担政策が成功するための条件とは何か。いくつかの条件があります。スウェーデンの経験を踏まえて主なものを三点指摘します。まず第一に、指導者が理想と倫理性に裏付けられた確たる信念のもとに、絶えざる対話のうちに国民の受益感覚に訴え、穏健な手法で焦らず、慌てずに着実に施策を展開することが必須の前提です。第二に、そのような政治プロセスの中で、国民に負担増を求めるに際して財源の使用先を国民に明示し、政策目的を明らかにして、いやしくも国民に媚びるようなパラマキは絶対に避けなければなりません。その支出でどんな政策効果が期待され、結果としてそれが実現したかどうか、国民に説明出来なければいけません。

育児政策を例にとってみれば、育児のいわゆる社会化を実現する上で、家族手当の増加で育児の直接費用の一部を公的に負担する施策よりも、女性が「就業と家事、育児」を両立出来る環境を確立し、子どもを持つことにより就業を縮小、または断念せざることを得なくなることによる所得減(これを育児の機会費用という)を防ぐ施策の方がはるかに経済社会に好ましい効果をもたらします。スウェーデンの育児効果の成功は、この点を熟知した上で政策決定を行ったことによるのです。

第三として、福祉全般の充実のための公的な支出増は、現在の国民負担の増加でまかない、公債や借入金に依存してはいけません。公共支出の必要性を認め、実施した現世代の人々が負担すべきであり、後世代に負担を先送りするなどは人倫に反すると考えるのが原則なのです。市場経済の下では景気変動は避けられません。景気下降期には、公的支出増や減税などの方法により経済を刺激するケインズ型の政策を行い、一時的に公的借入に依存することもやむを得ない場合があります。この場合でも、景気が反転回復すれば直ちに政策の発動を中止し、さらに一時的に膨らんだ借入などは早期に償還する措置が取らなければなりません。

この三つの条件が満たされることによって、国民は高い負担が老後の安全と安心のための貯蓄であること、あるいは次世代以降の子孫が豊かな生活を維持するための貯蓄であるという感覚を持つことができるのです。「税はとられるもの」という感覚では、高負担・高福祉社会への国家戦略を貫くことは難しいと言わざるを得ないでしょう。

最後に、スウェーデンにおける高齢社会のまちづくりについて考察してみました。

まず町とはなにか。町とは人々が自由に快適に生活できる場であり、経済活動、文化活動、社会活動・人々の交流など、人々の自由な活動を通じて人間性を回復できる場である。その町づくりとは何か。誰もが誤りと分かる回答としては、町づくりの目的は、経済活動の便益、効率化にある。この様な考え方の街づくりの結果は以下のようなものになる。

それは①自動車の利便を人間のアメニティより重視する傾向を生じた。②多くの地方都市の中心市街地や駅前市街地においてコンクリートの建物が幅を利かせ、醜い駐車場が一等地に建ち、本来、人間が各般の活動を行うべき通りをバス、タクシーその他の車がわがもの顔に走り回り、人間が肩をすぼめて歩く本末転倒を生じた。③何世代にもわたって蓄積されてきた都市の個性や景観美が惜しげもなく圧殺された。④そして何よりも大きな被害。それはコミュニティが崩壊したこと。都市は元気に働く人々が忙しく走り回る場であり、老人(人口の20%)、子ども(人口の15%)のいる場所がない状況が生み出された。⑤この結果、当初の目的であった経済的な活性化すら達成できず、郊外型のショッピング・センターなどにたちうち出来ないなど、町の衰退をもたらす例も多く生じた。

では改めて町づくりとは何か。①として町は何世代にもわたって蓄積されてきた伝統や個性の上になつて熟成すべきものである。壊して創り直すものでない。これは都市形成史、発展史重視の原則です。②はコミュニティ形成を重視すべきである。老人や子どももつどい、交流し、ペットを連れて楽しく散歩できる場でなければならない。町から「にぎわい」を除けば何も残らない。つまりコミュニティ重視の原則です。③は、歴史的景観美を重視しなければならない。町には必ず個性を体現するドミナントな建築物がある。これを尊重しなければならない。これを景観重視の原則と言えます。④には、町づくりは「持続可能性」を追求しなければならない。子どもたちに「いい町を創ったよ」と自信を持って引き継げる町づくりでなければならない。子どもたちが「ふるさと」としていずれは必ず帰りたいと思うような町でなければ、観光に魅力あふれる街ではありえない。これらは持続可能性重視の原則、環境保全重視の原則、人間生活中心の建築規制と言えるでしょう。そして最後の⑤として、寝たきり老人のいない町、老人の行く所のある町を創ろう。これは全市民の活動保障の原則です。

新シリーズ

「スウェーデンのニッポン人」(4)

荒瀬 響

「新しい時間」

(編集部から)大学卒業後、スウェーデン織物の技法を習得するため2000年代に単身渡瑞した筆者。当初はままならない言葉に孤独感と不安な日々。それが次第に周囲と意思が通じていく喜びが文面から赤裸々に伝わってきます。

プロフィール:1979年生まれ。京都出身。2003年に留学渡瑞。京都教育大学教育学部卒。大阪外国語大学スウェーデン語科単位修得。H. V. Skolaを卒業。現在は自宅にアトリエを持つ。

2003年8月中旬、青く高い空の広がるスウェーデン。2年前に初めて訪れて以来、何とかしてもう一度来たいと思い、再びやってきたスウェーデン。出発をあれだけ心待ちにして夢にまで見たこの国。にもかかわらず、この国に到着したとたん、予想もしなかった気持ちに心が覆いかぶさって、こんなはずじゃなかった、と一瞬思いました。今まで感じることがなかった「何か」に襲われたのです。そして、その緊張がふとけると、突然がくと自分の状況を認識しました。「ひとり」。

「お父さん、お母さん」。それから胸を砕かれるような、裂かれるような思い。つながらない公衆電話の先に両親の顔が見えて、走って戻ったホテル。がらんとした冷たい部屋で涙がとめどもなくあふれました。

それから数日後、ダーラナ(Dalarna)地方、レクサンド(Leksand)の小さな学校で織物の授業が始まりました。学んだことのない織物を好きになれるかどうかはわからないまま、一日一日が手探り状態でした。初めての国、初めての人々、初めての試み、そして初めての「ひとり」。24歳になって、頭を打つという経験を初めてしました。

勉強してきたスウェーデン語が紙の上でしか通じなくて、一生懸命理解してくれようとするクラスの友人たちにうまく思いを伝えきれず、まるで小さな子どもになったような気がして自分に苛立ちました。意思を伝えられないということで、自分を見てもえられないように思えました。伝えられない自分、出来ない自分、自分自身が分からない自分。

ようやく言葉が通じるようになったある日、友人に「初めての日のキョウは、本当にうれしそうだった。直ぐに友だちになりたいと思った」と言われました。ほとんど声を出せなかった自分が、友人には「うれしそう」と受けとられていたことに驚きました。

相手によって、使われる言葉のニュアンスが分からず、その言葉によって判断出来る筈のパーソナリティが分からなくて、自然と相手の目やしぐさを黙って見つめるように見つめるようになり、そこから相手を知ろうとしました。そうすると何の先入観をもつことなく、私なりに相手が理解できました。そして、自分がすてきな魅力ある人たちに囲まれていることを知りました。

通じ合いたい一心で伝えようすると、必ず一歩、さらに一歩、私に近づいてくれる人々。クリスマスには毎年、実家で当たり前のようにあたたかく迎えてくれる友人。おそらく全てといてもいいほど「スウェーデンの行事、習慣」をひとつひとつに経験させてくれた友人達。厳しくて、何時でもしっかりと私の織物を見てくださり、今ではありとあらゆる話のできる先生。学科が違って食堂で同じテーブルを囲んで話が出来る人々。そんな人々に囲まれながら、それでも一生懸命で気持ちが張りつめていたことにあらためて気づいたのは、ある日本人のご夫婦に出会った時でした。まるで実家に帰ったような、夢のようなあたたかさでおうちに招いていただき、感謝してもしきれないほどお世話をしてくださいました。

日本では、父と母が作り上げてくれたおだやかな時間の中で過ごしていました。時おり出入りする人達と接し、特に挑戦をしなくてもそのままうまくつながっていく毎日。

高校の卒業を控えたある日、担任の先生に言われました。

「あなたは問題なくこのまま幸せに人生を送るでしょう。でも一度海外へ出て、世界を見る価値はあります」

スウェーデンに来て、新しい私の毎日がはじまった時、先生の言葉を思い返しました。背景をなくした私がいて、出会うはずのなかった人と出会い、つながっていく。先生の言葉は、こうした経験をすることを意味されていたのではないかと思います。

スウェーデンでの暮らしから得たものは、目の前にいる人をもっと知りたい、もっとその人の話を聴きたいという、ある種の「欲望」かもしれません。自分自身が今いる場所に属していないという感覚によって、そうした「欲望」に素直に顔を向けられる自由が与えられたように思います。日本にいた頃は、必要ないと無意識に判断していたのでしょうが、スウェーデンという国に入ることでのためのいもなく、その「欲望」を満たそうと思うことができるのかもしれません。

レクサンド

——ある午後、ヨハンナとフレドリック、それにクリスティアンと湖へ散歩に。雪が降って、それが少し溶けたところにまた急に冷えて、積もった雪は表面が固くなっていた。それが陽に浴びて七色に光る。しばらくしゃがんでみとれていた。湖は氷。そこにクリスティアンが氷のかけらをすべらせると、信じられないくらいにきれいな音がした。シャラシャラシャラ、というのかキラキラキラキラというのか、何とも言い難い透き通った音。その音は、かけらが氷の上をすべっている間ずっと遠くまでつづき、そしてかけらが湖水に入って、静かに消える。きっと一生忘れない音——

初めてレクサンドの学校で織り上げたのは、古い布を裂いて織りこむ裂き織りマットでした。日本で、スウェーデン語の授業に出てきた「古い服やシーツでできたマット」は、どの家庭にも一枚はあると、先生が話してくださいました。確

かに学校の寮の部屋にもありました。

そんなマットを見てみたい、そこから生まれた「織ってみたい」という気持ちに任せて選んだのが、織物中心のテキスタイルコースでした。

たて糸とよこ糸が、どんなふうに関り合わせっていくのか、色の組み合わせでどんなふうに関べるのかを考ふる余裕は、まったくありませんでした。ただ、考へていたのは、自分で本当にマットが、それどころか「何か」が織れるのかどうか。

不安なまま作業が進んで行きました。たて糸を張るにも、本当にここまでしっかり張っていいのか、何度も確認し、ばたんばたん力を入れて織りこんでも大丈夫なのか、何度もたずねました。

何もかもが初めての経験でした。スケッチどおりによこ糸がすべて入り、「きっとこれで出来上がっているはず」の段階になった放課後、「終わったと思う」と、織機が隣り合わせだったクラスの友人にささやくと、「早くみんなに見せて」と大きな声が返ってきてびっくりしました。そんな大きな声だとみんなに聞こえるのに、と恥ずかしく思いました。案の定、集まったクラスメイトにせかされて、出来上がったと思われるマットを、本当にこのままたて糸を切り離していいのか何度も確かめながら、織機からはずしました。

みんなに見られる前に、少し時間をおいて、それから自分ひとりでどんなものが出来たのかそつとのぞいてみたいという思いもあって、そのはずしたてのマットを腕に抱えながら「どうしよう」と立っていると、校庭に出て広げてみようという友人にせがまれました。

せっかく織ったものをどうして地面に？日本から来てまもない私は、言葉がうまく出来ないために自分の気持ちを伝えることができませんでした。マットを地面に広げ、言われるがまま、やや腰を浮かせぎみに座ったとき、「織れた」といううれしい気持ちと「初めてのマットを地面に置いてすわってしまった」というときどきする気持ちが混ざって、変な緊張の中、なんだかおもしろいと感じました。

予定していた一年の滞在が二年になり、もっと織物を続けたいという思いでストックホルムの学校にさらに二年間通い、あの初めて織ったマットから数えて何度も機から織物をはずす作業を経験しました。それでも毎回、織機に張っているたて糸の終わりが見えると、

緊張と早く織り上がりを見たいという思いのために、手が早まり、心臓の鼓動が聞こえるように気持ちが高まります。私自身の好きな色がわかるようになり、私なりのスケッチもできるようになりました。

このスウェーデンの土の上で、もっと織物を続けたいと思います。初めてのマットの時には、じかに広げることにはめらいのあった地面。その地面の続きになるような織物をつくりたい、と今は思っています。広げた織物が地面に違和感なく受け容れられて、ふっと見えなくなる瞬間のあるような、そんな織物をつくりたい。そう思っています。

スウェーデンと私

スウェーデンに来て一年目は、無駄なことを話さなくなったためか(言葉の能力のために話せなかったためです)、よく小さかったころのことを思い出すようになりました。目にしたもの、自分の口にした言葉。好きだった音。人の言葉の合間や、ふとした光景を手がかりに、昔のできごとをたどってみようとする、思い出すという作業が途方もなくしんどいものだとなりました。居心地のよかった毎日から離れたことと、黙って見ることによって、ようやく自分自身を見つめることができるようになりました。

どうしてスウェーデンなのかとたずねられると、これまでは言葉で表現できませんでしたが、今なら「私が私として呼吸できる」という気持ちのよさだと、答えられそうな気がします。

自分を見つめることができる、やりたいと思うことが「やることのできる」ものであると感じられる。しかも年齢を重ねるごとに可能性が高まっていく、いつまでたってもチャンスを失わない。それが、私にとってのスウェーデンです。

静かにいてもいい、年を重ねてもいい、考へ直して、選り直してもいい。この国での生活はそういう自由と、それらを自分の責任で自分のために決断するという、両方がしっかりと存在しているように私には思われます。

2001年の旅行の帰路、この国に「戻って」こう思うに至った、自分の心の中に隠れていた理由が、実際に生活をする中でわかるのではないかと期待していました。その二年後に再び訪れたスウェーデンで、八年目の秋が過ぎました。ストックホルムの自宅にかまえたアトリエで織物をしながら、あの時にどうして私がそれほど強い魅力を感じたのか、考へることがあります。

まだ、言葉につなぎ合わせて表現することができませんが、10年も前のさまざまな断片が心に浮かびます。あの初めてのスウェーデン。迎え入れてくれた友人のお母さんの笑顔。雪の上に立った私の靴。自然なままでいられる自分。目を伏せる一瞬。透明な静けさ。初めての旅で体験したそれらの思い出が、自分自身にとって、母国での生活以上に懐かしいものを感じたのかもしれない。

家族のいる母国があること、どうしても戻ってきたいと思ったもう一つの国があること。自分の人生がこんなふうに関開するとは、高校生の頃は思いもしませんでした。両親の近くにいたいというたまらない思いをいつも抱えながら、それでもスウェーデンで自分をつくり続けていきたい、と思っています。なぜこの国が私にそう思わせるのか、そのことはおそらくいつまでも自分自身に問いつづけていくことになるでしょう。